

英語における質問力の育成について

—聴き手側の育成によるやり取りの向上—

英語科 宮本 真衣

本研究では、論理・表現の科目で求められている「話すこと（やり取り）」の力を伸ばすことに焦点を当て、新たな取り組みを行い、その効果を検証した。従来では自分自身の意見を話すことを鍛え、発信者側を育てるのがこれまでの授業で行ってきたことだが、今回は相手の意見を聞き、質問をし、相手からの意見を引き出す聴き手側の育成を目指した。取り組みを通して見えてきた効果、そして今後に向けての課題をまとめる。

<キーワード> 質問力 質問者 パフォーマンスチェック トリオワーク

1. 研究の背景及び目的

コミュニケーションに欠かせないものは何か。それは質問である。やり取りというキャッチボールが行われるためには、ただ自分の意見を話すだけでなく、それに対して反応すること、そして質問をしながら、相手の情報を引き出してやり取りを続けることが大切だ。現在の英語の授業では、「話すこと」「書くこと」をメインとした発信力の育成が中心となっている。しかし、それだけでは本来のコミュニケーションにはまだ遠い。相手の答えを引き出す質問する力が育たなければ、相手とやり取りすることはできない。学習指導要領で話すこと（やり取り）は、「日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合ったり、やり取りを通して必要な情報を得たりすることができるようにする」とある。そしてその中のやり取りを通して必要な情報を得るとは、「相手から自分に必要な情報を引き出すために質問をしたり、質問に対する応答を受けて更に質問したりするなどして、必要な情報の交換ができること」を意味している。そこで、本研究ではその話すこと（やり取り）の部分に焦点を当て、質問する力を育成するために、レッスンごとに行うパフォーマンスチェックにおいて、「発表者」だけでなく「質問者」も評価の対象に入れた。評価の対象となることで、必然的に質問をしなければならない状況が生み出され、自分の意見を伝えるだけでなく、質問をする側も大切であることに気付けると考えたからである。

本研究で育成を目指す「質問力」とは、文法的な正確さを求めているものではなく、相手に質問を投げかけ、その答えを深めていく力を指している。

2. 昨年の論理・表現 I

使用した教科書はMAINSTREAM English Logic and Expression I（増進堂）で、昨年度から1年生は分割クラスで1クラス15人で行っている。この授業で行うパフォーマンスチェックは、テキストの中から活動の対象になるLessonを選択して実施する。そしてこの活動はペアワークではなく、トリオワークとして実施した。ここでのパフォーマンスチェックは1人が質問をし、1人がそれに対して答え、1人がその評価をするというものだ。活動の最後には自己評価を行い、チェックシートは提出。そしてLessonのCan-Do自己評価も含め、主体性を評価するものとしてデータ入力する。1年生のパフォーマンスチェックでは、自分の意見を話す発信者側に重きを置き、1年間活動を続けた。

3. 現在の論理・表現 II の流れ

論理・表現 II では、MAINSTREAM English Logic and Expression II（増進堂）を使用しており、2年生は昨年から引き続き、生徒間で行うパフォーマンスチェックを継続している。授業の流れは以下の通りである。

- ①各Lessonのトピックと関連した会話活動と、モデルとなるスピーチ等のリスニング問題に取り組む
- ②モデル原稿から表現や文法を学ぶ
- ③文法問題に取り組む
- ④モデルを参考にしながら、実際にスピーチ等の原稿を書き、練習する
- ⑤パフォーマンスチェックをトリオワークで実施する

授業では、冒頭に簡単な質問トレーニングを行っている。ここでの質問トレーニングは、生徒が疑問文を日本語から英語にするPattern Practiceを指す。また、これ以外にも特定のテーマを与えて、それについて話すSmall Talkの時間も設け、自分たちで質問を考えやり取りをする機会を増やした。

4. 2年生におけるパフォーマンスチェック

パフォーマンスチェックの際は、「発表者」「質問者」「評価者」の3つの役割を生徒が交代で行っていく。それぞれの役割と活動の流れは以下の通りである。

	発表者	質問者	評価者
①	2人の前で1分間発表する	発表を聞く	発表の様子をiPadで録画する
②	質問を待つ	質問を30秒で考える	発表者の評価をする
③	質問に対して答える	質問を1分半行う	質問の様子をiPadで録画する
④	役割交代の準備	役割交代の準備	質問者の評価をする

すべての役割を交代で行った後、生徒はそれぞれタブレットで録画された動画を見ながら、自己評価と今回の発表の振り返りを行う。その際、評価者として評価した紙は、発表者と質問者、それぞれに渡す。そして授業のCAN-DOチェックと共に、Google Formsへ点数を入力する。提出された評価シートは一度回収し、入力した点数は「主体性」の点数としている。

2023年度 第2学年 論理表現Ⅱ Performance Check 相互評価シート

<発表者への評価> Lesson5 Speaking(発表)Theme:**報道発表**.....

今回の評価基準

①Volume(声の大きさ)・Eye Contact(目線)

4 points : 最初から最後まで力強く、とてもはっきりと聞こえる + 何も見ずに発表ができています。
 3 points : 最初から最後まで、無難に聞こえる + キーワードだけを見て話している。
 2 points : 最初から最後まで、無難に聞こえる + 原稿を見てしまう。
 1 points : 聞き取りづらいことが多い or 聞き手を見ていないことがほとんど。

②Visual Materials(資格資料) ※資料を示すタイミングが良い・わかりやすい・資料を示しながら確認をとったり、同意を求める・注目ポイントを指さして伝える。

4 points : 上記をすべてクリアしている。
 3 points : 上記を3つクリアしている。
 2 points : 上記を2つクリアしている。
 1 points : 上記をクリアしているのが1つ以下である。

③Intonation(読み上げ方・抑揚)

4 points : 声の高さ、大きさ、速さやトーンなど、聞き手を常に意識して、引きつける話し方ができる。
 3 points : 全体的に聞き手を意識して話そうとしていて、抑揚も感じる。
 2 points : 聞き手を意識して話そうとしているが、時々抑揚に聞こえる。
 1 points : 抑揚をほとんど感じられず、棒読みに聞こえる。

④Contents(原稿構成)

4 points : 構成も表現もわかりやすく、かつ発表された要約の点を深く取る内容だった。
 3 points : 構成も表現もわかりやすいが、発表された要約の点を深く取る内容ではなかった。
 2 points : 構成はわかりやすいが、表現がところどころわかりにくい。
 1 points : 構成も表現もわかりにくい。

自己評価 2年 組 番 氏名 _____

評価	①Volume・Eye Contact:	4	3	2	1
	②Visual Materials:	4	3	2	1
	③Intonation:	4	3	2	1
	④Contents:	4	3	2	1
	合計				

今回の振り返り: _____

2023年度 第2学年 論理表現Ⅱ Performance Check 相互評価シート

<質問者への評価> *スピーチを聞いて30秒後、1分半のやりとりをします。

評価基準:

①Number of exchanges(やりとりの数) ※質問→回答で1回

4 points : 4回以上やりとりしている。
 3 points : 3回やりとりしている。
 2 points : 2回やりとりしている。
 1 points : 1回以下。

②Questions(質問内容)

4 points : 一問一答で終わらせることなく、相手の答えに合わせて、常にその答えを深める質問をしている。
 3 points : 最初から最後までではないが、時折相手の答えを深める質問をしている。
 2 points : それぞれの質問につながりはないが、複数質問はしている。
 1 points : 質問が1回までしかできていない。

③Attitude(態度) ※相手の言葉を繰り返す・相手の答えに対するコメントを言う・相手を打つ・リアクションが良い。

4 points : 上記をすべてクリアしている。
 3 points : 上記を3つクリアしている。
 2 points : 上記を2つクリアしている。
 1 points : 上記をクリアしているのが1つ以下である。

自己評価 2年 組 番 氏名 _____

評価	①Number of exchanges:	4	3	2	1
	②Questions:	4	3	2	1
	③Attitude:	4	3	2	1
	合計				

<自分か聞いた質問を、動画を見て元の表書き出すそう + 文法的な誤りを見つけたら、赤ペンで訂正しよう。>

①、
 ②、
 ③、
 ④、

今回の振り返り: _____

切り取り

評価者	発表者()への評価	質問者()への評価
①Volume・Eye Contact:	4 3 2 1	①Number of exchanges: 4 3 2 1
②Visual Materials:	4 3 2 1	②Questions: 4 3 2 1
③Intonation:	4 3 2 1	③Attitude: 4 3 2 1
④Contents:	4 3 2 1	
	合計 [] 点	合計 [] 点

左側：上は<発表者>に対する評価基準と自己評価欄。下の部分は評価者であるときに記入し、最後に<発表者>と<評価者>へ切り取って渡す。

右側：上は<質問者>に対する評価基準と自己評価欄。下の振り返りのところでは、動画を見ながら自分が実際に聞いていた質問を書き出し、文法的な誤りを見つけたら訂正する。



トリオワークで発表に取り組む生徒たち（写真左）と、動画を見ながら振り返る生徒たち（写真右）

生徒Aの振り返り
 (前回よりも上手くいった感想が書かれており、そこから文の構成の仕方に目を向けている)

評価 ①Number of exchanges: 4 · ③ · 2 · 1
 ②Questions: 4 · ③ · 2 · 1
 ③Attitude: ④ · 3 · 2 · 1

合計 10

<自分が聞いた質問を、動画を見てそのまま書き出そう> ←文法的な誤りを見つけたら、赤ペンで訂正しよう

① What do you want to change school rules? → *What's the school rules unless you want to change?*
 ② Why do you want to change it?
 ③ What do you want to change school rules other?
 ④ → *What other school rules would you like to change?*
 ⑤

今回の振り返り: 前回と比べて質問がより、返ってきた回答についての質問ができた。また、深い質問には答えがなくて、その辺りについて英語や文のつくりを改めて知ることができた。

生徒Bの振り返り
 (質問の回数だけでなく、答えを深めるための、follow-up questionに目を向けている)

評価 ①Number of exchanges: 4 · ③ · 2 · 1
 ②Questions: 4 · ③ · 2 · 1
 ③Attitude: 4 · ③ · 2 · 1

合計 9

<自分が聞いた質問を、動画を見てそのまま書き出そう> ←文法的な誤りを見つけたら、赤ペンで訂正しよう

① What time do you want to go home? → *What would you like to do if you could go home early?*
 ② What do you want to do if you go home early?
 ③ What time do you go to school in the morning?
 ④ → *What time do you want to leave home in the morning?*
 ⑤

今回の振り返り: 質問の回数が少なく、相手の答えを深められなかったのでもっと深まる質問をしたいと思った。

生徒Cの振り返り
 (文法にも目を向けながら、前回よりも上達した部分を考えている)

評価 ①Number of exchanges: ④ · 3 · 2 · 1
 ②Questions: ④ · 3 · 2 · 1
 ③Attitude: 4 · ③ · 2 · 1

合計 11

<自分が聞いた質問を、動画を見てそのまま書き出そう> ←文法的な誤りを見つけたら、赤ペンで訂正しよう

① Why do you want to build heart pools
 ② Why do you like swimming? *warm*
 ③ Can you swim well?
 ④ What do you like *kind of swim* you like *swimming* for?
 ⑤ Why do you like *17-16*
 ⑥ How *fast* can you swim

今回の振り返り: 文法がより以前より、普通話で話すようになった。その前は、英語で話すのが難しかった。

5. その他の取り組み

質問力、そしてやり取りする力を育成するために現在行っている取り組みが、他に3つある。

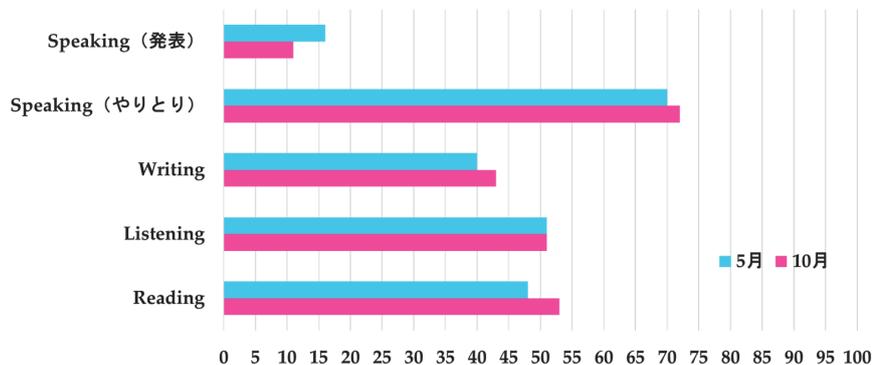
- ①授業の冒頭で、疑問文を作るトレーニングをペアワークとして行う
- ②Warm-Upとして、Small Talkに取り組む。
- ③ALTと定期的に1対1で話す活動を行う。

①については、2つのやり方を試した。1つ目は1学期の間、毎回特定の文法にフォーカスを当てた疑問文をまず日本語で提示し、それをペアで英語にする活動を行った。文法レベルは中学生レベルとした。そして2つ目は現在も続けているが、質問が日本語と英語で100個書かれた質問リストを配布し、それをペアで英語にする活動を行っている。Pattern Practiceを入れることで、文法面を補うことができると考えたからである。②については、2学期に入ってから取り入れるようになった。毎回テーマを変えながら、そのテーマについてひたすら1人は質問者として質問をし、相手からの答えを深めていく活動を行っている。③は実践の場として、ネイティブの先生に対して自分が質問をしながら、これまでやってきたことを活かして、会話をする機会として設けている。

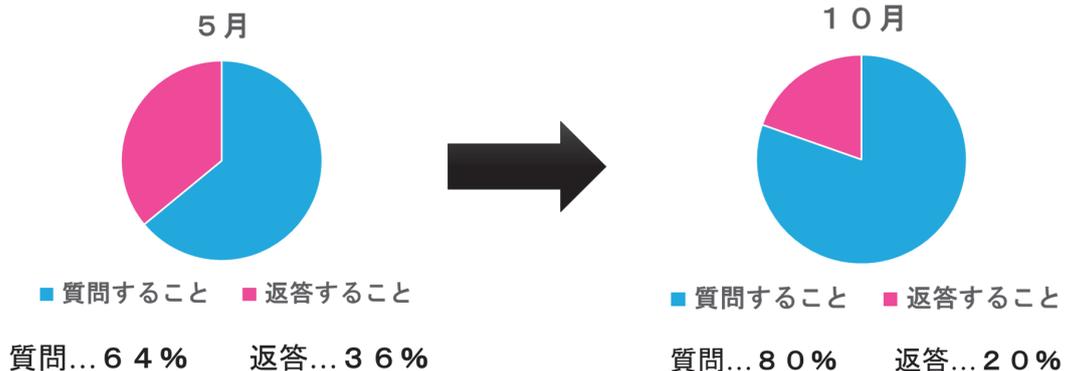
6. アンケート調査

2023年5月・10月に、英語の意識アンケートを2年生（回答者112名）に実施した。5月のアンケートの目的は、生徒実際に質問する側と答える側ではどちらに対して苦手意識を持っていて、その理由や詳細を把握することで、授業内で取り組む活動として何が必要かを判断するためである。10月のアンケートは、質問力を育成するために行ってきた授業を通して、生徒の意識変化があったかどうかを確認するためである。以下は、各生徒の質問に対する回答と、その内容をまとめたものである。

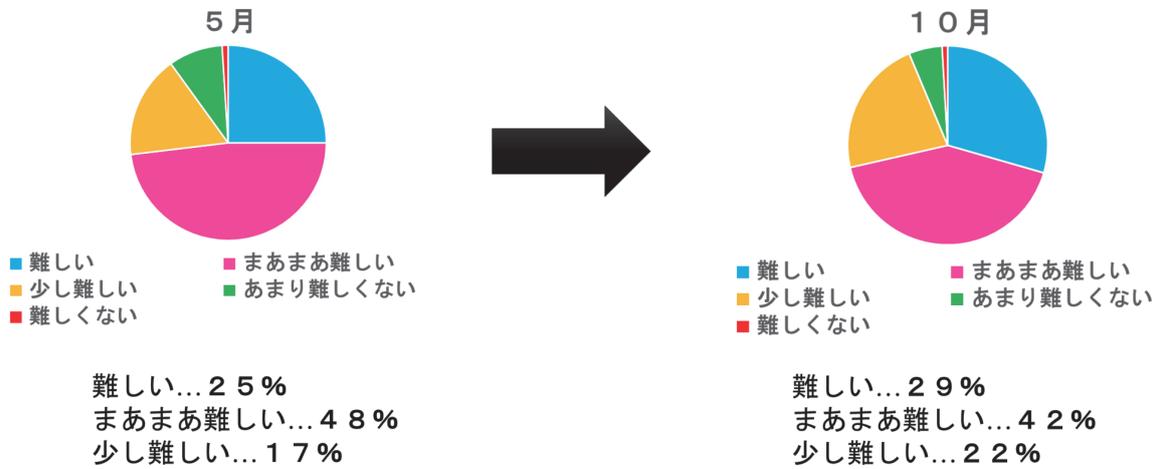
設問1 あなたが英語の授業内で身に付けたい力は何か。※複数回答可



設問2 あなたがペアやグループで英語を使って会話をするときに、難しいと感じるのはどちらか？



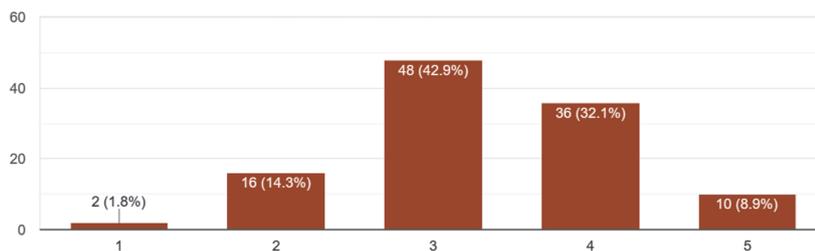
設問3 英語で質問することはどれぐらい難しいと感じるか？



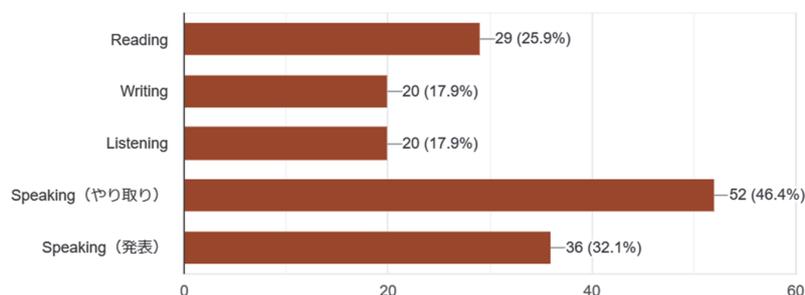
設問4 (原稿などを用意せず、即興で行う場合) 英語で質問する際、最も当てはまるものはどれか？



設問5 論理表現の授業において、4月から半年経って、【質問者】としての力がついてきたと感じるか？
5...感じる 4...まあまあ感じる 3...少し感じる 2...あまり感じない 1...感じない



設問6 論理表現の授業において、4月から半年経って、自分の中ではどの力が上がってきていると感じるか？
※複数選択可



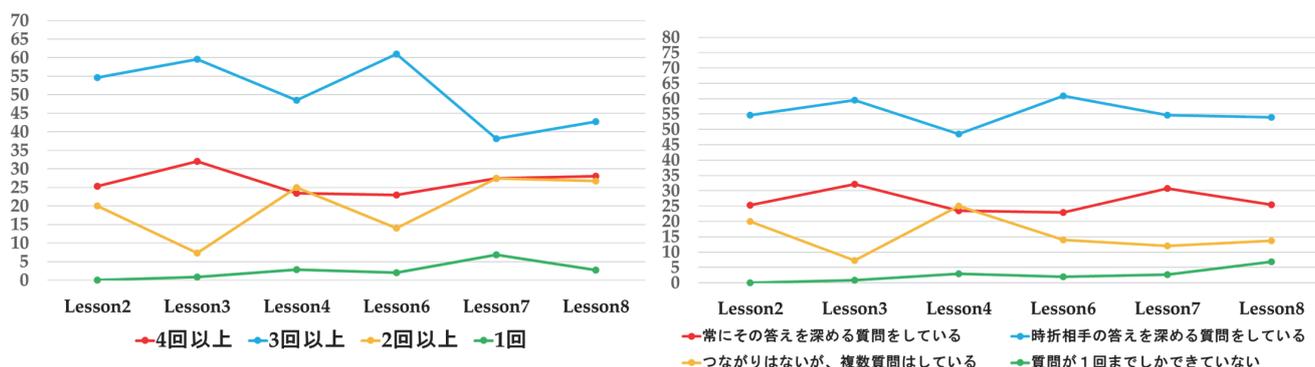
7. アンケート考察

設問1の授業内で身に付けたい英語の力では、5月に引き続き10月でも最も割合が多かったのはSpeaking（やり取り）だった。共に70人を超えており、生徒たちが英語で話すことに対して、高い意欲を持っていることが分かる。それと合わせて割合が高かったのはListeningだった。選んでいる生徒が挙げた理由を見ていくと、「海外に行ったときに役立ちそうだから」「会話をする際に流暢に話したいから」「英語でコミュニケーションをとれるようにしたいから」「先生や友達がいなくてできないものをやりたいから」「話すことは授業以外で身に付けるのが難しいから」など、実践的な場面があることを想定して、その時のために力を身に付けたい生徒が多くいた。逆にSpeaking（発表）は4技能5領域の中で最も低い割合だったが、「やり取りのほうが機会が多そう」と答えた生徒もいたことから、生徒にとっては英語で発表というものがどういった場面で役に立つのか、というイメージがしにくいからではないかと推測する。しかし、今後総合的な探究の時間などで発表の力は求められる要素の一つだと言える。そう考えると、現在は生徒たちの興味関心が低いため、何らかの工夫をしながら、彼らが意欲的に英語の授業でも取り組んでいけるようにしていかなければならない。また、ReadingやWritingを選んでいる生徒は、大学入試を意識していたり、定期考査や模試で苦手とする部分を克服したいという考えから、選択している生徒が多くいた。10月になってその2つの割合が伸びていたのは、今後の入試を考える生徒が増えてきたからではないかと推察できる。

設問2を見ると、5月の時点では質問することのほうが難しいと考える生徒が64.6%であったが、10月の時点では80%となった。自分は質問する機会が増えて力を付けていくことができれば、質問に対する抵抗感是和らぐのではないかと考えていた。しかし、今回の結果は自分が予想していたものとは反対の結果となった。ただ、この数字は決して悪い数字と捉えるのではなく、生徒が質問するという意識をしっかりと向けられており、真剣に活動に取り組んでいるからこそ難しさを感じているからではないかと考える。

では、実際に生徒がどれぐらい質問することを難しく感じているのかだが、設問3を見てみると5月も10月も「難しい」「まあまあ難しい」と答えた生徒が7割以上いる。ここで注目したいのが設問4だが、「最初の質問はできるが、その後質問が続かず、会話を続けられない」と答えている生徒が45.3%いて、「質問内容は最初から最後まで思い浮かぶが、英語で言うことができない」と答えている生徒が32.9%いるという点である。ここから、生徒が質問に難しさを感じる理由として挙げられるのは、①質問そのものが思い浮かぶかどうか、②語彙力や文法といった英語力が備わっているかどうか、の2点であることがわかる。①に該当する生徒の理由の中には、「相手の答えに合わせた質問を自分から生み出さなければいけないから」「日本語でも難しいことを他言語でするのは難易度が高いと思うから」というような質問する行為に対するコメントが見られた。また、②に該当する生徒の理由の中には、「質問が思い浮かんでも英語にできないから」「返答は普通に文章を作ればできるが、質問は疑問文を考えないといけないので、難しいと感じるから」というような英語に焦点を当てたコメントが見られた。②については、授業内の様々な取り組みによって今後補っていくべき課題だが、①については英語の授業内だけでは補いきれない部分であるため、他教科との連携を上手く図っていく必要がある。

設問5を見ていくと、質問することに対して難しさを感じてはいるものの、8割以上の生徒が質問する力を付けられてきていると感じていることが分かる。以下のグラフは、実際にパフォーマンスチェックの中でのやり取りの数と、その質問の質の変化を表したものである。ここでは生徒の実感具合とリンクしているのかどうかを見ていく。なお、Lesson5は発表形式を変えたため含んでいない。



各Lessonにおける数の変動は、そのLessonのテーマが生徒にとって取り組みやすいものかどうか大きく影響しているようだった。Lesson 7からはディスカッションを行う単元であったため、発表内容そのものが難しくなっていることが質問することへ影響していた。しかし、全体を通してみていくと、少しずつではあるが複数質問ができる生徒が増えてきており、常に相手の答えを深める質問をできる生徒の数が安定してきているのが分かる。複数質問ができるということは、やり取りをしていく点では生徒たちが成長を見せているので、今後はそのやり取りの質を高められるようにしていくことが課題であると考えられる。

そして論理表現の授業において、自分の中ではどの力が上がってきていると感じるのか、という設問6の質問に対してだが、46.4%の生徒がSpeaking（やり取り）と答えており、4技能5領域の中で最も高い割合となった。回答した生徒の理由には「質問トレーニングなどにより深める質問で考えた言葉を早く英語にできるようになったから」「Lessonの最後にいつも発表があってその時に質問のやり取りをするから」「授業のはじめや授業中にたくさんやりとりする機会があるから」といった、授業での取り組みが反映されていることを感じさせる言葉が多く見られた。また、発表する力においても伸びてきていると感じている生徒が次に多く、「発表を重ねるうちに慣れたから」と取り組む機会が増えたことに触れている生徒が多かったため、いかに繰り返し取り組むかが大切なのかを感じさせられた。

8. 今後の展望

学習指導要領における論理・表現Ⅱで求められる話すこと（やり取り）では、

- (ア) 学校外での生活や地域社会などの日常的な話題について、必要に応じて、使用する語句や文、やり取りの具体的な進め方が示される状況で、情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合ったり、自分自身の状況や要望を伝え、相手の意向を把握しながら交渉したりする活動。また、やり取りした内容を整理して発表したり、文章を書いたりする活動
- (イ) 日常的な話題や社会的な話題に関して聞いたり読んだりした内容について、必要に応じて、使用する語句や文、やり取りの具体的な進め方が示される状況で、課題を明確に説明し、その解決策を提案し合ったり、意見や主張、課題の解決策などを適切な理由や根拠とともに詳しく伝え合ったりするディベートやディスカッションをする活動。また、やり取りした内容を踏まえて、自分自身の考えなどを整理して発表したり、文章を書いたりする活動

とある。「論理・表現Ⅰ」を発展させ、(ア)では単に必要な情報を得るだけでなく、相手から得た情報から相手の意向を理解して、互いが納得する結果をどのように導き出すかを考えながら、やり取りを継続する力を付けることが求められている。また、(イ)でディベートやディスカッションにおいては課題を明確に説明し、その解決策を提案し合うことが求められている。どちらもやり取りを進められる力が生徒に備わっていないため、発信する力をつけることはもちろんのこと、その情報を引き出すための質問していく力は引き続き向上させられるようにしなければならない。また、アンケートの結果を見ていくと、生徒たち自身もこの先で英語を実践的に使うことを想定して力を伸ばそうとしているため、今後は具体的な場面を設定したやり取りの活動を取り入れていく必要があるだろう。

一方で、大学入試に向けて受験の力はあるのか、という点を見過ごすことはできない。模試の結果を見ていくと、リスニングパートは全国平均点を上回る結果となっている。授業内で多くのやり取りを重ねることによって耳が慣れ、この結果に繋がっているのではないかと考えている。しかしそれ以外の文法、長文、英作文の設問に関しては、全国平均点に届いていない部分が多く見られる。授業内ではコミュニケーションを中心に行っているため、生徒がいかに家庭学習に取り組むかという、授業外での勉強の質がこれまで以上に求められている。特に論理・表現の授業ではこれまでの英語表現と違って、取り組む文法問題の量も減ってきてしまっている。そのため、Speakingの部分は伸びてきてはいるものの、試験に反映される部分の英語力を伸ばしきれていない印象があるため、これは今後も向き合うべき課題だと言える。

9. まとめ

自分は常々、英語の授業の中でどちらかが意見を話し、終わっていくその一方通行な会話の姿に違和感を覚えていた。だが、今回質問することに目を向けたことにより、生徒も日々の授業の中で質問をしながら会話をすることが「当たり前」になってきた。今まではただ、話すだけで終わっていた活動がやり取りに近くなってきているように感じている。質問力の育成を図ることで、コミュニケーション能力が身についていき、会話の主導権を自らが握ることになるため、やり取りや発表中での聞く姿勢も変わった。また、繰り返し取り組み続けることによって、準備をしなくともその場で、即興で会話していくことが可能となってきた。しかし、話すことはできていても、まだまだ文法面など、英語教師としては見過ごしにくい部分も、現実的な問題として残されている。どちらを優先する、というわけではなく、どちらも達成できるような授業内での取り組みを今後も試みていかなければならない。そして、多くの生徒たちが授業の中でしかできないこととして、**Speaking** 活動をイメージしていることを常に忘れず、より実践的な英語の授業を今後も目指していかなければならない。

そして質問力、というのは英語の世界だけで求められるものではない。質問するということは、どんな部分に興味を持つのか、どんな部分に対して疑問を抱くのが大切となる。これは近年求められるようになってきた「探究力」にも繋がっていくため、コミュニケーションの中だけの話ではない。質問力を育成していくためには、協同的な学びや各教科でのアプローチが必要不可欠だ。英語という教科にとどまらず、様々な場面で疑問を抱く探究活動が充実していくと、それらが質問力に繋がっていく可能性があるのではないかと考える。今回の取り組みは、自分が今まで見ていた視点を少し変えた部分における取り組みであるため、今後も発信者だけに目を向けるのではなく、それを受け取る側を育てることを引き続き心がけていく。

10. 参考文献

弓削靖子（2023）コミュニケーション能力育成は質問力を鍛えることから 英語教育2023年3月号
大修館書店

関谷 弘毅（2010） 「話し手」の英語スピーキング力を促す
- 「聞き手」の育成 - カウンセリング技法, スピーキングテスト技法教授の効果-

高等学校学習指導要領（平成30年告示）

浦島久（2019） 「聞ける、話せる、続けられる 英会話は質問力」 東京：オープンゲート

ウォーレン・バーガー（2022） 「質問力を鍛える本」 ニュートンプレス

バウンド（2021） 「こどもロジカル思考 なぜ論理的に考えることが大切なのかがわかる本」 カンゼン

茂木健一郎（2016） 「最高の結果を引き出す質問力:その問い方が、脳を変える!」 河出書房新社